紫陽花の　八重咲く如く
八つ代にを　いませわが背子　見つつ思はむ

橘諸兄（巻二十・四四四八）

やまと　万葉がたり

この歌は、755年（天平勝宝7歳）5月11日に、左大臣橘諸兄が平城京内の右大弁多治比国人の邸宅で開いた宴にて詠んだ三首（四四四六～四四四八番歌）のうちの一つです。一首目は国人が太政官の上司である諸兄の長寿を祈る歌、二首目は諸兄から国人への返歌です。今回取り上げたのは三首目で、諸兄が「わが背子」の長寿を祈るものです。

国人は後に、諸兄の嫡男・奈良麻呂が757年（天平勝宝9歳）に起こした変に連座して配流されます。変の発覚時に、遠江守として都を離れていたにもかかわらず連座したのは、橘氏に近い立場であったためでしょう。今回の宴は諸兄が主催した体裁となっていますが、実際は国人が自邸の宴に諸兄を招待したと推測されます。

この宴の後、同年5月18日（四四四九～四四五一番歌）と11月28日（四四五四番歌）に奈良麻呂邸で宴が開かれ、諸兄も出席しました。これら一連の宴が、奈良麻呂の変の謀議の場であったとの指摘もあります。変の後、事前に届け出のない宴は制限されることになります。

同年11月には聖武太上天皇が病臥しており、この間に諸兄が不敬な発言をしたと讒言されます。この件は不問に付されましたが、諸兄は左大臣を辞任します。

本歌の「わが背子」が聖武太上天皇か国人か、判断の難しいところです。仮に、聖武太上天皇を指しているのなら、諸兄との良好な関係を示唆します。

藤原仲麻呂の台頭により、政治的影響力を失いつつある諸兄にとって、聖武太上天皇との関係は重要なものでした。本歌を詠んだ半年後の讒言により、政治生命を絶たれた諸兄の思いはどのようなものだったでしょうか。

（県立万葉文化館主任研究員・中本和）

≪訳≫紫陽花が八重に咲くように、いよいよ長い年月を生きてくださいよ、あなた。紫陽花を見ながらあなたをお慕いしましょう。

やまと万葉がたり

妹が家も継ぎて見ましを大和なる大島の嶺に家もあらましを

天智天皇（巻二・九一）

斉明天皇7年7月24日（西暦661年8月24日）に斉明天皇が没し、天智天皇が称制しました。

称制とは『史記』や『漢書』にみえる語で、本来は天子が幼いときに皇太后が政治を代行することを意味しますが、日本においては、先の天皇が亡くなった後、新天皇が即位の儀を行わないままに執政することをいいました。

『日本書紀』によれば、斉明天皇は百済へ援軍を派遣するため、筑紫の朝倉橘広庭宮に滞在中であったとあります。645年の乙巳の変以降、実権を握りながらも皇位につかなかったとされる中大兄皇子（天智天皇）ですが、斉明天皇亡き後、救援軍の指揮が急務であったとみられます。翌年にかけて準備を進め唐・新羅軍へ挑んだものの、663年に白村江の戦いで大敗し、百済は滅亡しました。

その後、天智天皇は壱岐・対馬・筑紫に防人を置き、大宰府防衛のための水城を築き、近江大津宮に遷都して、668年にようやく即位します。しかし、翌669年には右腕であった藤原鎌足が亡くなり、自身も671年に没しました。

この歌は天智天皇が鏡王女へ贈った歌で、大和国以外の場所から「大和なる大島の嶺」を眺め、鏡王女の家がそこにあったら見つづけることもできるのに、と実際には見えないことを嘆いた内容です。天智天皇代の歌として収載されていますが、作歌時期はよくわかっていません。「大島の嶺」は所在未詳であり、一説に信貴山や高安山とされ、孝徳天皇代の難波宮で詠んだ歌ともいわれています。

天智天皇代には額田王や久米禅師などによる多彩な歌が詠まれたことで知られますが、天皇自身の作としては三山歌（巻一・一三～一五）とこの歌のみが伝わっています。

（県立万葉文化館・井上さやか）

≪訳≫お前の家も見つづけていたいのに。大和の大島の山に家もあればよいものを。